

仲間との「かかわり」から生まれる楽しい体育授業

～「跳の運動遊び」の授業実践より～

谷口 佳都司

生涯において運動に親しんでいこうとする子どもになってほしい。そう願いながら、私たち学校の教師は工夫した体育授業を日々行っている。放課後や休日に「スポーツ少年団」「〇〇スクール」「〇〇教室」等に運動を習いに行っている子もいれば、体育授業以外はほとんど運動をしない子もいる。人によって日常生活の運動経験に大きな差がある。どの子にも運動の機会が保障される学校の体育授業が持つ役割は重要であり、どの子の運動意欲も高めていく学習を期待される。子どもたちが「運動の魅力」に触れ、「運動の力が伸びる喜び」を実感できるようにしたいと考える。

仲間との「かかわり」を中心に置いた授業づくりを研究し、仲間と共に運動することによって得ることができる楽しさや喜びを味わわせ、より一層運動意欲を高めさせることを目指した。

(キーワード)：グループ学習、対話、発見、課題解決

1. 1 仲間との「かかわり」から生まれる楽しさ

個人的スポーツであっても集団的スポーツであっても、一緒にする仲間がいることは大きなプラス材料になる。共に喜び合う。励まし合う。教え合う。一緒に練習する。互いにライバルとなる。共に記録に挑戦する。このような仲間との「かかわり」ができれば、子どもたちももっと意欲的に運動できると考えた。

そこで、今年度の個人研究テーマを『仲間との「かかわり」から生まれる楽しさ』として体育授業づくりの研究を進めてきた。

1. 2 仲間との「かかわり」を深めるために

仲間との「かかわり」を深めることを重点に置いた体育授業を目指した。子ども同士の積極的な対話を生むために、以下のような手立てを織り交ぜた。

- 個人的スポーツ・集団的なスポーツにも、グループ学習を多く取り入れる。
- 一斉学習で、「運動の方法」「学習のルール」「グループ学習の進め方」の確認、全体の共通課題の設定、発見したことの交流、仲間の頑張りを賞賛、学習の振り返り等をさせる。
- 子どもが親しみやすく取り組みやすい技能獲得の場を設定し、動きの工夫や作戦を考えさせる。
- 個々の学習カードに、「誰に何をアドバイスしたのか」「誰から何をアドバイスしてもらったのか」、「どんなことがわかったのか」「できるようになったのか」を具体的に記入させる。

1. 3 低学年のグループ学習について

体育の学習における様々な学習形態の中でも、特にグループ学習が子どもたち一人ひとりの自主性、創造性を重視し、自ら課題を解決していこうとする力を伸ばしていくものだと考えた。

低学年の子どもは自己中心的な面が残っているため、

他者の視点で見ることや他者の考えを理解するのは難しい。グループ学習での活動場面が多すぎると、学ぶ姿勢・ルール・視点などが曖昧になり、学習の方向性が見失われ成立しにくくなることが予想される。

そこで、4月の体育授業から少しずつグループ学習を経験させ、自分の考えと違う子と向き合う機会を作る。そうすることで、仲間の考えを意識しながら対話できる力、自ら課題解決できる力を伸ばしていくのである。(写真1)



写真1 一斉学習の一場面

2. 「跳の運動遊び」から学ばせたいこと

本単元では『ジャンプランド』を設定し、6つの場で様々なジャンプを経験する学習をさせていく。特に、次に挙げる2つのことを子どもたちに学ばせたいと考えた。

1つ目は、ジャンプ自体が持つ魅力を理解し味わせると共に、ジャンプの新たな楽しみ方を発見する力を育てることである。この力を育てるためには、技能やできばえより、楽しさに浸りながら夢中になって運動できる環境づくりが大切である。思い切って安全に

運動できる教具や場、子ども同士のかかわりの充実、子どもへの支援や言葉かけの工夫をしていく。そうすれば、「全部できた。」「上手に跳ぶことができた。」ということとどまらず、「〇〇ちゃん。私、今やるから見ておいてよ。」「こんなにしてみたら、もっと高く（遠く）ジャンプできるかも。」・・・と子ども同士の言動が飛び交い、夢中になりながら次々と新たな課題に向かって学び続けることができる。つまり、新たな楽しみ方を発見していくのである。

2つ目は、仲間の意見やアドバイスを自分の学習に活かしていく力を育てることである。本学級の大半の子どもが運動好きであり、運動に対する向上心が強いと感じられる。よって、単独の活動にならないよう、グループの子や同じ場を選んだ子と一緒に活動できる学習設定にし、学級全体での話し合い時間も十分に取し、しっかり対話が成されるようにしたいと考える。そして、他の人が気づいたことをヒントにして、自分の変容につなげて欲しい。

以上のことを考慮して、この単元を構成した。

3. 授業の実際

3. 1 単元

2年 跳の運動遊び「わくわく！ジャンプランド」

3. 2 単元目標

仲間と一緒に、動きを工夫しながらジャンプ遊びを楽しんで行うことができる。

【関心・意欲・態度】

- 楽しみながら、進んで運動に取り組むことができる。
- ルールを守り、仲間と協力し、準備や後片付けをすることができる。

【思考・判断】

- 場の設定・遊び方を考えたり工夫したりすることができる。
- より高く遠くリズムカルにジャンプする工夫ができる。

【技能】

- 全身を使いながら、両足や片足でいろいろなジャンプができる。
- 安全に着地することができる。

3. 3 単元計画（全7時間）

- オリエンテーション（45分×1時間）
- ねらい1…グループごとで、6つの場に合ったジャンプに挑戦して楽しむ。（45分×1時間+25分×4時間）
- ねらい2…個々で、自分が挑戦したい場でジャンプを磨いて楽しむ。（20分×4時間+35分×1時間）
- まとめ（10分×1時間）

3. 4 自ら学ぶ学習が成されるための手立て

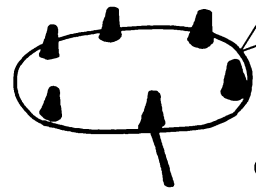
3. 4. 1 「冒険」をイメージした場でジャンプについて考える

本単元のような「〇〇〇の運動遊び」で、意欲を持ち続けながら学習していくためには、学習に対する具体的なめあてを子どもたちに持たせることが大切である。そこで、この教材との出合せ方を工夫した。

本学級の子どもたちは、国語の物語教材「スイミー」

や「お手紙」等の学習では、登場人物の立場になってどの場面でどんなことをしたのかを考えることに積極的に取り組んできた。「跳の運動遊び」の学習でも、子どもの興味をより引き出すために「冒険」をイメージさせ、次のような6つの場を設定し、ジャンプの仕方を考えさせていくようにした。（図1）

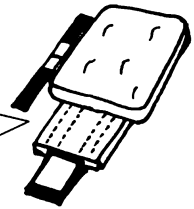
○ブラックホール



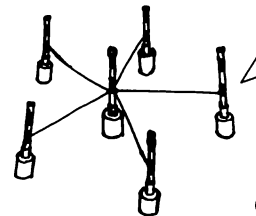
サークルの外を少ない歩数でバウンディングしながら1周する。中に足を踏み入れてしまうと吸い込まれてアウト。

○絶対に落ちてはいけない谷

ロイター板からセーフティマットまで助走の勢いをつけて一気にジャンプ。真ん中のマットは谷なので注意。



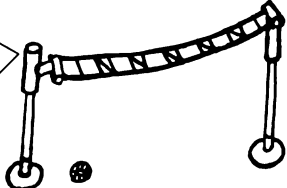
○大きなクモの巣



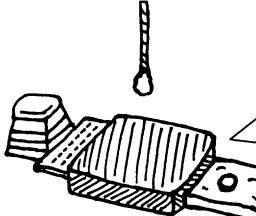
同じ高さのゴムひもを両足や片足でリズムカルにジャンプしていく。ゴムひもに触れないで跳び越そう。

○高いところにあるカギ穴

はしごのように張られたゴムひも。四角の穴を目がけ、カギのボールを上からダンクシュート。



○たった1つしかない着地点



ロープにつかまり、跳び箱の上からターザンをする。輪の中に両足で着地すれば見事成功。

○炎の壁

横向きに張ったゴムひもを助走してきてジャンプ。メラメラと燃える炎の上をポーンと高く跳び越そう。

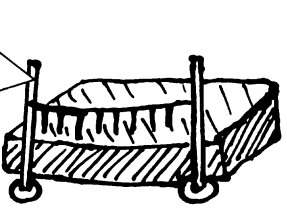


図1 「冒険」をイメージさせる6つの場

「高い所に手が届くようにジャンプする」「自分のいる所から離れた所に少ない歩数で移動する」「高さのある物をジャンプして跳び越す」・・・にはどうすれば良いのか。子どもたちがこれらの場を克服するために、ジャンプのフォームやタイミング・助走の仕方を工夫しなければならないという状況にし、課題を解決させていく。そして、それぞれの場で子どもたちが

ジャンプをするそばで教師がより細やかな支援を行い、子どもたちの自主性や創造性を育てていこうと考えた。

3. 4. 2 グループ学習を基盤に対話を生む

本單元については、グループ学習が中心となる学習形態にした。仲間と一緒に競争したり励まし合ったりしながら楽しく運動できることが大切だと考えた。仲間同士での教え合いや協力が、一人ひとりで学ぶ以上の習得や変容が生まれると期待したからである。例えば、個人学習カードには「誰に何をアドバイスしたのか」「誰から何をアドバイスしてもらったか」「どんなことがわかったのか・できるようになったのか」を具体的に記入させ、仲間との対話の充実を図った。

また、一斉学習については、ジャンプの工夫やコツ・頑張っ取り組む仲間の様子等を、子どもたち同士伝え合う場とした。学級全体での対話を大切にしながら、みんなが楽しんで学習できるジャンプランド、そして、教え合い励まし合う温かい雰囲気作りを目指した。

3. 5 学習の様子

(第1時の学習〈オリエンテーション〉)

「ジャンプすること」についてのアンケート調査、今後の学習についての話し合い等をさせた。

アンケートの結果によると、29人中ジャンプすることが「◎楽しい」と答えた子は17人、「○普通」は12人、「△楽しくない」は0人であった。楽しい理由として、「空中に浮いて楽しい。」「ピョンピョンするのが楽しい。」「1年生の時にジャンプして楽しかったから。」「マリオになった気分だから。」などという意見があった。普通の理由として、「ちょっとだけ楽しい。」「足が疲れるから。」「ジャンプは上に上がるだけだから。」「跳んだ時に、しんどい時としんどくない時がある。」「ちょっと好きじゃない。」「ちょっとしか跳べないから。」「前にたくさんジャンプをやって、足が痛くなったから。」「立ち幅跳びで○○○cmだったから。」等であった。

ジャンプすることが楽しいと感じている子はクラスの半数以上いた。だが、今年度5月のアンケート調査で「体育が好き」と答えた子どもが23人いたことを考えると、本学級の子どもたちにとって、ジャンプすることは、体育の様々な運動の中でやや興味関心の少ない運動であることが分かった。そして、ジャンプがあまり得意でないと感じている子にとっては、楽しむことができない運動と考えた。

また、跳の運動を多く繰り返すことで、足を痛めてしまうことがないようにしたい。

以上のことを考慮し、次の3点に気をつけて、第2時からの学習を進めた。

- ・得意と感じている子もそうでない子も目標をもってジャンプの運動ができること。
- ・足だけでなく他の部分も使う運動も入れること。
- ・安全面に気をつけた場の設定にすること。

(第3時の学習)

第2時と比べ、準備体操と柔軟体操を効率よく行うようになってきた。場の準備についても、今回の方が短時間で手早くできていた。滑り止めのシートを敷くことまで考えて準備できていた。

ねらい1では、グループで教え合いながら6つの場をローテーションして回った。ねらい2では、各自がやってみたい場を1～2カ所選び、ジャンプをさらに磨いた。この時間から初めて作った「ブラックホール」の場(写真2)については、ルールや運動の仕方をはっきり理解できていないようだったので、子どもたちがやっているところに教師も一緒に入り、見本を見せながら具体的な動き方を教えた。ねらい2の活動については、予定していたよりも時間が短くなったために、子どもたちの「○○の場をもっと何度もやってみよう。」という思いに添えなかった。次の第4時では、ねらい2の時間を十分確保できるよう、準備を手早く行わせ、ジャンプの工夫の方にもっと目を向けさせていこうと考えた。



写真2 「ブラックホール」の場

(第5時の学習)

[子どもの個人学習カードより]

【どんなことを教えてもらったのか】

- ・(「ブラックホール」で)足を同じ間隔で跳べばいい。
- ・高く跳ぶといいよ。

【どんなことを教えたのか】

- ・ジャンプしてからボールを入れないといけないよ。

【ジャンプで工夫したこと】

- ・力いっぱいすると鈴が鳴らなくなったよ。
- ・地面を強く蹴った。
- ・膝をよく曲げてジャンプする。・片足をあげてジャンプする。

【気づいたこと・思ったこと】

- ・着地で、「2回両足」のところに付箋を貼れた。
- ・○○君に教えてもらった「最初はゆっくり走って、後からスピードを上げる。」とよく跳べた。
- ・約束を守っていない子がいる。

【今度の時間に頑張りたいこと】

- ・着地点で、両足がきっちり輪っかに入るようにしたい。

4. 授業の考察

この単元を終了してから、子どもたちにアンケートを取った。29人中、ジャンプすることが「◎楽しい」と答えた子は26人、「○普通」は3人であった。楽しい理由には、「ジャンプすると気持ちがいいから。」「色々な楽しいジャンプをするから。」「高く跳べるようになったから。」「色々なジャンプの仕方がわかった。」「みんなで楽しめたから。」等。普通の理由には、「ちょっとジャンプが嫌い。」「あまり高く跳べないから。」「しんどくなるから。」ということが挙げられていた。

分かったことやできるようになったことに、次のようなことが書かれていた。「何度も練習を続けていくことで、初めより高く遠くに跳べるようになることが分かった。」「跳び方のコツを自分で見つけたり仲間に教えられたりして上手くジャンプできるようになった。」という意見があった。

アンケートの結果や子どもの学習状況を見てみると、学級の子どもの大半がジャンプ運動への学習意欲を持ち続けて取り組むことができたと感じている。これは、個人学習カードを毎時間記入させたこと・グループ学習を多く取り入れてきたことにより、学級の子ども全員が仲間への声かけを意識し積極的なかかわりができたからである。しかし、ジャンプが思うように上達せずに運動のしんどさが先行してしまい、学習意欲が低下してしまった子もいた。教師の言葉かけや働きかけ、仲間同士のかかわり等の不十分さや不適切さが原因と考えた。この単元を学習して良かったと思うことがあれば、全員が楽しく学習できたのではないだろうか。

5. 研究の成果と今後の課題

第3時から第6時で、ねらい1の活動の後に子どもたちを全員集めて話し合いを持ち、「上手なジャンプがあったか?」「ねらい2の活動でどんなことを工夫してジャンプしてみたいか?」等について発言させた。そして、ねらい2の活動の後にも「先ほど友だちから出てきたやり方をやってみてどうだったか?」を尋ね、意見を求めた。

発見した上手なジャンプについて説明し、実際にやって見せる中で、『足を曲げてジャンプすること』、『スピードを工夫した助走すること』の2点が上手なジャンプの重要ポイントだということが分かってきた。そして、どの場のどんなジャンプでどういう動きをすれば良いのか、いくつもの具体例を紹介し合い、細かいポイントについて吟味されていった。

足を曲げてジャンプすることは、どの場のジャンプにも共通する。この答えに、子どもたちは行き着くことができた。また、助走については、「全力で走る」という工夫だけでなく、「初めはゆっくりでだんだんスピードを上げる。」「ジャンプする直前に思いっきり走る。」「もっと離れたところから走る。」等、様々な方法が発言された。(写真3)



写真3 助走を工夫してジャンプする児童

このような話し合いが展開されるようになったのは、この単元の後半ごろからであった。一人の子の発言を聞き、その意見に関連した発言をする子がだんだん増えてきたのであった。一つのことについて意見がつかっていったのは、大きな収穫であった。

今年度、様々な単元の学習をしてきたが、仲間の意見にただ共感するだけであったり、別々のことを発言するだけになったりしていた。しかし、今回のように、一つのことについて深く話し合うことができたのは、グループ学習の効果だと感じている。グループで活動している子どもたちの様子を見てみると、自分の順番を待っている間に、他の子のジャンプをよく見ていた。他の子のジャンプから、真似してみたいことやジャンプのコツをたくさん発見できたのではないだろうか。その積み重ねにより、自分のジャンプをさらに磨いていくことにつながったのだと感じている。

以上のように、グループ学習を中心とした学習形態により、仲間とのかかわりを深め、吟味していく対話を生む工夫を行ってきた。

今後も、みんなで課題を解決し、みんなで運動を楽しむ体育授業を目指し、さらに研究を続けていきたい。

参考文献：

- (1) 渡邊 彰・今関 豊一 編著 2009年
「平成20年改訂 小学校教育課程講座 体育」 ぎょうせい
- (2) 中村敏雄 著 1998年
「体育のグループ学習」 創文企画
- (3) 和歌山市立中之島小学校・今福小学校 2009年
「平成21年度和歌山市教科等別研修会 体育学習研究発表会 授業要項」